

J  
P  
C

THE INTERVIEW

山田 俊之

ボディパーカッション教育振興会代表  
九州大谷短期大学幼児教育学科 教授

追悼特集 アラシ・エーベル

シリーズ 新しい生活様式と打楽器 Vol.1 「音楽の授業」の今とこれから

THE CHECK / 打楽器奏者のための巣ごもり特集

つちーの太鼓野郎 第二十八回

QUARTERLY  
ISSUE  
MAGAZINE

No.165

平成31年10月27日発行 三巻郵便物認可 令和2年10月27日発行(元)1冊1,400円(税込)1,540円(税込) 定価 1,650円





# THE INTERVIEW

# 山田 俊之

九州大谷短期大学幼児教育学科 教授  
ボディパーカッション教育振興会代表



今回は、九州大谷短期大学幼児教育学科 教授、  
ボディパーカッション教育振興会代表、  
ボディパーカッション教育の第一人者である  
「山田俊之」氏をフォーカスします。

こんにちは!「山田俊之 ヤマダトシユキ (JPC スタッフ)」です。  
こんにちは!「山田俊之 ヤマダトシユキ」です。

2018年9月西日本打楽器協会パーカッションフェスティバルの懇親会の席でのそんな会話から始まった交流。長い間、温めてきた企画がついに実現。

とにかく、リズム&パーカッションが大好き!その活動の幅は広がるばかり!そんな氏にインタビューを敢行し、ワールドワイドな活動から見出されたボディパーカッションの魅力をご存分に語っていただきました。



取材：パーカッション・シティ 山田俊幸 取材協力：ボディパーカッション協会

## ボディパーカッション誕生のきっかけ

私が勤務していた小学校は、福岡県久留米市内でも農村地帯にある1学年1クラスの1番小さい小学校でした。当時は楽譜が読めて楽器を演奏しリズムを上手に理解出来る子はなかなかいませんでした。

当時は、経験の浅い若手教師としてクラスをなんとかまめたい!クラスの中でうまくクラスの輪の中に入れない子供と一緒に何かをしたい!と言う熱血漢あふれる意識があったのだと思います。笑

時は1986年、小学校4年生を担任したことがきっかけです。年度始めのクラス替えがあって、すぐにその出来事は起こりました。(以下の文章は当時の様子です)

「A男が暴れています!先生早くして下さい。」女の子が金切り声を上げ、叫んで職員室に入ってきた。この子たちを受け持ち、始業式からこれで10日間続いたことになる。

小学校4年生の担任になって朝の職員朝礼の時、毎日のようにクラスの子も達が呼びにきていた。慌てて階段を駆け上がって2階の教室まで全速力でいく。だから怪我をしていないだろうか、教室の扉を開けるまでは不安で一杯になる。ドアを開けて教室を見渡すと、A男が教室のほぼ中央に立ち、その回りには誰もいない。A男を中心に同心円を描くように遠巻きにみんなが見ている。一人の女の子が教室の隅で泣いており、A男は肩で息をしてまだ興奮状態が続いている。「どうした!」と私が聞くと、A男は一点を見つめたまま目に涙を溜めて何も答えない。周りの子どもたちにどうしたのか聞いてみると、A男がいつものように急に怒りだして、自分の机や椅子を蹴って倒したりし始めたようだった。少し興奮状態から落ち着くのをみて、A男の肩を抱くようにして「A男どうしたんだ」と聞いた。A男が「B子ちゃんが消しゴムを貸してくれなかった。」とぼつりと言った。教室の隅で泣いているB子ちゃんに聞いてみると「A男の言ったことがよく聞こえなかった。」と答えた。

1986年当時勤務していた福岡県久留米市立大橋小学校の時である。周囲に高い建物がなく、のどかな農村地帯で1学年1クラスという、1年生の時からほとんど同じ顔触れの子も達の小規模な小学校である。A男のことは、周りの子ども達はある程度慣れており、人間関係も定着していた。しかし、「キレる」状態になるのは小学校3年生頃から激しくなったようだった。そして、先のような出来事が毎日のように起こっていた。

A男はきつくと教室から出て行き運動場を逃げ回ってしまう。数日前は私と1時間ほど学校中を走り回り、午前中はずっとA男の右手を持って授業を行っていた。しかし、興奮が静まると何事もなかったようにしているのが常であった。ある時は、生徒が私を慌てて呼びにきたので急いで教室に行ってみるとA男がいない。どこにいるのだろうかと教室

を見回すとなんと木製のテレビの上にはいるではないか。当時は、画面18インチで木製の頑丈なテレビが教室前方の左側にあり、A男がその上に乗って、押しピン(画びょう)をみんなの方に向かって投げかけていた。それから、A男のことを何とかしたいと思うようになってきた。

当時は勉強が苦手な運動も苦手な子どもはどこで自分の存在価値を見つけるのだろうかという教師として悩んでおり、A男がまさにこれに当てはまる生徒だった。

ある日、給食準備中の放送でリズムカルにアレンジした「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」(モーツァルト作曲)の演奏が聞こえてきた。今まで音楽の時間でもなかなか集中できず、歌や合奏にも興味を示さなかったA男がなんとその曲に合わせて手でリズムを取っているのではないかと考えた。その時、手拍子などを使ってA男も参加できる楽しい授業が出来るのではないかと考えた。A男は授業中注意散漫でなかなか集中して物事を継続できない。そこが一番の課題だった。早速、その年の夏休みに教材作りを始めた。

子どもにとって一番辛いことはクラスの仲間から認められず、疎外感を味わうことだ。当時、私はA男がクラスの員として所属感や仲間意識が持てる良い方法はないかと考えていた。そして出来上がった自主教材が、ボディパーカッションを取り入れた『山ちゃんの楽しいリズムスクール』である。朝の会、帰りの会、学級活動や「ゆりの時間」(昭和61年当時の呼称)などで1日に5分から10分程度行っていた。他の子どもたちへの働きかけとしては、体で表現することの楽しさを伝えた。A男が集中できれば他のみんなもできるはず。A男が楽しければみんなも楽しい。A男のクラスで「ボディパーカッション教育」を始めて約半年が経った。この間にA男は落ち着きを取り戻し、他の教科の授業に対しても参加する姿勢を見せてくれるようになった。それは、「ボディパーカッション教育活動」によって自分が参加できる場が生まれ、まわりの子どもたちがA男を認めてくれる雰囲気が出てきたからだと感じている。それから15年後(2001年)、NHK交響楽団が演奏する「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」に合わせてボディパーカッションの子ども達の共演が実現するとは誰も想像できなかった。

(以上、当時の様子です。・・・平成21年度NHK障害福祉賞論文より)

※参考動画：鑑賞曲とボディパーカッション「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」

この時、前述の「山ちゃんの楽しいリズムスクール」のまともに、教室の子どもたちの席が1列から4列まで分かれているので、そこで簡単なリズムアンサンブルをしていました。その原型が4パートに分かれている「手拍子の花たば」です。この曲は、平成24年度(2012年)に、特別支援教育用教科書(文部科学省編集)に採用されました。





## パーカッションアンサンブルとの出会いが、ボディパーカッション活動に発展。(1983年～1992年)

当時小学校で鼓笛隊(マーチングバンド)の指導をしていました。1学年1クラスなのでクラスの子どもたちに、リズムや打楽器の楽しさを伝えたいと思って、学校にある打楽器(タンバリン、トライアングル、小中大太鼓など)や自分が持っている楽器(スネアドラム、簡単なドラムセット、ラテン楽器)を教室や体育館で子どもたちと叩いて楽しんでいました。子どもたちも、メロディ楽器だと難しいですが打楽器(パーカッション)は喜んで取り組んでくれました。

小学校での指導と同時に、趣味で地元の吹奏楽団に所属し、パーカッションを担当しスネアドラムや小物全般、ドラムセットなども演奏していたので、吹奏楽やオーケストラでパーカッションを担当している人たちと「久留米パーカッションアンサンブル」というグループを結成して「リズムとのふれあいコンサート」を開催してアンサンブルを楽しんでいました(当時、マリンバの田代佳代子さんや打楽器奏者の関家真一郎さん、プリチストン吹奏楽団打楽器パート、九大フィル打楽器パートOB「ポットベリー」の方々に参加してくれました)。

演奏曲は1部で「トムトムフリー」「アンコールインジャズ」「ドラミンホーム」「木片のための音楽」「剣の舞」「トッカータウイズアウトインストルメンタル」等や、2部ではオリジナル編曲で子どもたちが知っている有名なクラシック曲をアレンジして、様々な世界の民族リズムを紹介して打楽器を楽しむコンサートです。

このようなリズムを通じた活動を子どもたちが大好きだと確信し、後にボディパーカッションコンサートを開催するようになり、たくさん子どもたちが参加する演奏会に繋がりました。

きっかけは前述のとおり、A君も参加できる活動を行いたいと思ったことでした。そして、リズム打ちのような活動はA君のような突発的な行動を起こしやすい児童にはとても有効のように感じていました。

このことは東邦大学名誉教授であり、さまざまなメディアで活躍しているストレス・セロトニン研究の第一人者である有田秀穂教授が提唱する「リズム活動がセロトニン神経強化に効果がある」に結びつき、後に山野楽器本店で一緒にシンポジウムをさせて頂きとても納得がいく出来事でした。

久留米市の適応指導教室(公的不登校施設)や現在行っている心療内科に併設の病院学級(長期不登校児童施設)でリズム活動を取り入れた音楽療法セッションで大変役に立っています(久留米市・のぞえ総合診療病院)。

小学校担任教師にとって、クラスがまとまることは一番の課題でした。どんなに授業技術や事前準備ができていても、担任と子どもたちが「クラスが楽しい!」と思えなかつたら残念な結果になります。また、子どもたちにとっても不幸です。

私は、授業は上手くありませんでしたが(笑)子どもたちとイベントのように様々な企画を考えるのが大好きでした。その一つとして「山ちゃんの楽しいリズムスクール」を考えました。

## 「ロックトラップ」と岡田知之先生との出会い(1988年頃)

私が、身体を使った「手拍子の花束たば」や「花火」、クラシック音楽に合わせたボディパーカッション活動を子どもたちと楽しんでいる時に、岡田知之先生が主宰されているパーカッションアンサンブルを鑑賞する機会がありました。その時、演奏会終了後のアンコールで「ロックトラップ」を演奏されました。

当時は、そのような曲があるとは知らずに見ても嬉しかったのを覚えています。当時、私がおこなっていた「手拍子の花束」とは全く違って、リズムが複雑に絡み合いとてもカッコよく見えました。しかし、「短時間で小学生の子どもたちができるようにするのは無理かな」と思いました。

当時、オーケストラのパーカッションをお手伝いしている時、弦楽器の年配の方に「子どもたちと体を叩いてアンサンブルや音楽に合わせて楽しんでいますよ!」という話をしたら、「そんなのは、メロディもハーモニーも美しい音色もないから音楽ではなく、身体を叩



2019年 岡田知之先生のご自宅にて

いて遊んでいるだけじゃないの」とか「そんなのは、音楽ではないよ、せっかくの音楽を邪魔しているかもしれないので、やめたほうがいい!」などと言われたりしていました。

そのような時期に嬉しかったことは、岡田先生が、当時私が教室で行っている活動の発展的なことを、演奏会のアンコール「ロックトラップ」でされていたことです。見事に音楽として成立しているその演奏を聴きとても勇気づけられたのを覚えています。もう30年以上も前の話ですけど(笑)

その後、1998年2月に東京都児童会館(渋谷)で「体がすべて楽器です!」ボディパーカッション・コンサートを行う機会があり、岡田先生にお声をかけさせていただき来場して頂きました。

現在、岡田知之先生にはボディパーカッション教育振興会を立ち上げて、NHK交響楽団コンサートマスターの篠崎史紀氏と共に、振興会の特任理事になって頂いています。

昨年、岡田先生のご自宅にお伺いしたら、奥様もご在宅でした。そこでロックトラップについての「秘話」をお聞きしました。奥様が言われるには、ロックトラップの楽譜は「ニューヨークカーネギーホール」のそばにある楽器店で隣の棚の一番下にあるのを奥様が偶然見つけられて、それを岡田知之先生に「こんな面白い楽譜がありますよ」と言って渡されたのが、日本で広まったきっかけだそうです。写真は、その時一緒にお話をお聞きし撮らせていただいた写真です。

岡田先生の演奏会で「ロックトラップ」が鑑賞できていなければ、現在のボディパーカッション教育活動もなかったのではないかと思います(奥様ありがとうございます)。

## 「パブリカ」フーリン楽団に関わったこと

最初のきっかけは、2019年5月です。NHK教育番組のディレクターの方から、今までに様々な障害の子どもたちとボディパーカッションを楽しんでいることで問い合わせが来ました。同じ月、東京の葛飾区立南綾瀬小学校で全校児童を対象に公開授業(1～3年、4～6年の2時間)を行う予定になっていましたので、NHK「パブリカ・プロジェクト」の方に数名で見学に来ていただきました。

そして、私が関わらせて頂いたのは「パブリカ・インクルーシブ」バージョンです。インクルーシブバージョンとは「障害のあるなしにかかわらずすべての子どもたちが楽しめる」ことをテーマに、「歌が歌えなくても、上手にダンスができなくても楽しめる」ボディパーカッション活動のことです。その様子は、NHK「みんなのうた」(9月27日放送)で、ボディパーカッション・バージョンとして放送されました。

(神奈川県厚木市小学校で指導)

その時の模様は右のQRコードからご覧いただけます。  
2020応援ソング「パブリカ」『ボディパーカッション』バージョン



その後、フーリン5人のメンバーと様々な障害のある子どもたち(肢体不自由、知的障害、発達障害、ダウン症、聴覚障害、視覚障害)と一緒に「パブリカ」を歌い、ダンスをしたり楽器を演奏したりする中で、誰でも簡単にできるボディパーカッションを一部分取り入れて頂きました。その作品は、フーリン楽団として放送されています。

フーリン子どもたちと障害がある子どもたちが一つになって作品を作り上げる姿はとても感動しました。

## 海外での活動について

ここでは、海外での活動のいくつかをご紹介します。



2019年33年後の同窓会「山ちゃんの楽しいリズムスクール」誕生の子どもたちと





フォーリン楽団の子どもたち

## 1、カンボジア教育支援とスタディツアー

### 【カンボジア教育支援の概要と経緯】

・2015年、津田正之先生（国立音楽大学教授。前文部科学省教育課程調査官・音楽・H20～H28年度）、JHP「学校を作る会」より「ボディパーカッション教育」をカンボジア教育カリキュラムへ導入のための実践研究指導を依頼される。

・カンボジアは、音楽等の芸術教育分野においても「楽譜が読めない、楽器がない、外国曲を知らない」外国の音楽教育を導入することは難しく、「音楽」という教科がなく教師も音楽教育を受けたことがない。教師の音楽的な指導力にも課題がある

・カンボジアの学校では、教材関係の道具や楽器も満足になく、日本が支援しているハード面での楽器贈呈（ピアノ、ハーモニカ、リコーダー等）が定着できない現状があった。

・2016年、上記の理由から、当時文科省教育課程調査官時の津田正之先生が、ボディパーカッション教育は「楽器がなくても、音符が読めなくても、歌が上手に歌えなくても（歌を知らなくても）音楽を楽しめるのではないかと考え、カンボジア教育研修と公開授業研究を依頼。2016、2017年にカンボジア教育省との共同プロジェクトとして、実際に公立学校教員研修と公開授業（児童養護施設と公立小学校）を行う。

### 【カンボジア教育支援交流スタディツアーの経過と成果】

・2018年3月、私が九州大学教育学部教職科目で担当していた「特別活動指導法」（2015年～）の授業に興味を持った学生に呼びかけ、九州大学の学生とカンボジアスタディツアーを実施。

・2019年3月に津田正之先生（国立音楽大学教授）と山田俊之（九州大谷短期大学）が引率し、九州大学、国立音楽大学、広島大学院生（カンボジアの芸術教育研究指導）18名でスタディツアーを行う。

・カンボジアの教育現状と今後の課題について学習（JHP「学校を作る会」カンボジア事務局長矢加部氏より講話と質疑応答、ディスカッション）

・カンボジア養護施設（小中学生）での音楽交流とボディパーカッション指導。

・ブノンペン王立芸術大学と九州大学、国立音楽大学、広島大学生徒のボディパーカッション活動交流と、日本とカンボジアの相互演奏披露。

・カンボジアを代表する演奏家であり、ブノンペン王立芸術大学講師陣によるカンボジア伝統音楽を学び、質疑応答を行う。

・ブノンペン王立芸術大学付属中学校とカンボジア公立小学校で音楽交流とボディパーカッション教育指導を行う。



カンボジア教育支援交流（山田、津田先生、JHPと現地メンバー、九州大、国立音大、広島大学の学生）

## 2、ウィーン国立歌劇場とオーストリア国立高齢者福祉施設ボランティア

### 【ウィーン国立歌劇場でボディパーカッション教育教材紹介と演奏】

・2017、2018年8月、ウィーン国立歌劇場において、新たな音楽教育教材として披露するためにボディパーカッション教育作品発表を行った。同行したメンバーは、大学教員、小・中学校音楽教師、幼児教育関係者、特別支援学校教諭、ピアノ講師等です。観客は、ほとんどウィーンの方々と、とても興味・関心を持って鑑賞して頂きました。特にインクルーシブ教育視点に置いた教材として高く評価頂いたことが心に残っています。演奏内容は、平成17年度小学校音楽教科書に採用された「花火」（作曲：山田俊之）、平成24年度文部科学省編集の特別支援教育用音楽教科書に採用された「手拍子の花束」（作曲：山田俊之）、音楽之友社より出版した書籍より「キッズウエーブ」（作曲：山田俊之）などの曲を編曲して披露し、「障害者も一緒に楽しめる音楽教材」として好評を博しました。

・ウィーンは「世界の音楽の都」と呼ばれ、またウィーン市内に国際連合ウィーン事務局（United Nations Office at Vienna, UNOV）設置されている。今後、国連ウィーン事務局において「世界100カ国の子ども達へボディパーカッション教育の楽しさ」をテーマに演奏発表や研究報告することを視野に入れています。

### 【オーストリア国立高齢者福祉施設でのボランティア・ワークショップ】

・2018年8月17日、ウィーン市内のオーストリア国立高齢者福祉施設でボディパーカッションを取り入れた演奏披露や、参加者全員が一緒に演奏できるボランティア・ワークショップを行いました。

・具体的には、高齢者福祉レクリエーションを中心とした「ボディパーカッション&リズム活動プログラムです」（教材：「楽しいボディパーカッション①～③」（2002～2004年、山田俊之著、音楽之友社を使用）。

・今回のボランティア訪問ワークショップの様子は、「身体を使って、音楽的に活動すること」、「言葉は通じなくても、音楽とリズム活動は国境を越えて楽しめる！」活動でした。今回の経験は、2019年9月「第19回日本音楽療法学会学術大会全国大会」（大阪国際会議場）で特別講座を行い内容をお伝えしました。

## 3、ニューヨークカーネギーホール作品発表と高齢者福祉施設ボランティア

2019年12月26日、ニューヨークカーネギーホールにおいて、新たな音楽・福祉教育教材として披露するためにボディパーカッション教育作品の発表を行いました。同行したメンバーは、大学教員、小・中学校教師、特別支援学校教師、幼児教育関係者（園長）、ピアノ講師等です。演奏発表内容は、過去に2017年、2018年に行った、ウィーン国立歌劇場・オーストリア国立福祉施設でのワークショップが好評を博し、そのことが契機になりニューヨークカーネギーホール作品発表と高齢者福祉施設ボランティアを行うことになりました。曲目は、すべてオリジナル曲で、作品も出版している楽曲を忠実に再現し「子ども達が学校やレッスンで取り組んでいる教育教材」「特別支援教育、福祉教育、音楽療法で活用している教育福祉教材」として紹介しました。具体的には、拙著「行事で盛り上がる」山ちゃんの楽しいボディパーカッションや「楽しいボディパーカッション③リズムで発表会」などから選曲しました。結果は、日本で今まで受けたことのない大きな歓声と共に大きな評価を得ることができとても驚いています。参加者全員が教育や福祉関係者でパーカッションの演奏家でもなく、精一杯取り組みましたが演奏レベルが高いわけでもありませんでした。

### 【海外で高く評価された結果を考察すると以下のようなことが考えられます。】

1. すべてオリジナル曲で、子ども達の音楽教育の基礎を考えた曲であったこと
2. 30年近く、教育、特別支援、福祉の現場で活用された教材であり、障がい者や高齢者ボランティア活動を積極的に行ってきた教材だったこと。
3. 欧米の観客も、リズム活動を中心とした身体を使って（手拍子、叩く、大きく動かす）「見せる音楽」教材を鑑賞する機会がほとんどなかった。
4. 「楽譜が読めなくても、歌が上手に歌えなくても、楽器が演奏できなくても」身体だけで参加できる音楽であったこと。
5. 福祉活動やボランティア意識が高い欧米各国では、障害者が一緒にできるインクルーシブ教育教材であり、間違えても大丈夫！という考え方が高く評価されたこと。

## ボディパーカッション教育振興会について

ボディパーカッション教育振興会の活動の概略について説明させていただくために、振興会の規約を抜粋してご紹介させていただきます。





2019年12月 ニューヨークカーネギーホール



2020年2月、銀座山野楽器本店「第28回ボディパーカッション講座」にて  
ボディパーカッション振興会理事メンバー（篠崎史紀氏を囲んで）

## 【テーマ】

「聴覚障害があっても音楽の楽しさを体感できるボディパーカッション教育を伝えよう！」

「5年後50ヶ国、10年後100ヶ国の全ての子どもたちへボディパーカッション教育の楽しさを伝えたい！」

\*「全ての子ども達」は、障害（聴覚障害、知的障害、視覚障害、肢体不自由、発達障害、ダウン症、他）がある子ども達と健常な子どもたちが「全ての子ども達」という意味です

※参考動画：ボディパーカッション教育\_聴覚特別支援（旧聾）学校とNHK交響楽団



## 第1章 総則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人ボディパーカッション教育振興会という。

## 第2章 目的及び事業

(目的)

第3条 この法人は、子どもたちや障害者をはじめ、広く市民に対して、楽器を使わずにからだで音楽を表現できるボディパーカッション教育の普及に関する事業を行い、音楽教育、子どもたちの健全育成、国際交流などの推進に寄与することを目的とする。

(活動の種類)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、次に掲げる種類の活動を行う。

- (1) 障害の児童生徒を含む、すべての人々へ文化、芸術の振興を図る活動
- (2) 海外教育支援、国際協力の活動
- (3) 子どもの健全育成を図る活動保健、
- (4) 医療又は福祉の増進を図る活動
- (5) 社会教育の推進を図る活動

(事業)

第5条 この法人は、第3条の目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として、次の事業を行う。

- (1) ボディパーカッション教育に関する調査・研究及び普及・啓発事業
- (2) ボディパーカッション教育を通じた青少年健全育成事業、障害児・者支援活動
- (3) ボディパーカッション教育に関する指導者育成事業
- (4) 福祉施設や病院等における音楽・レクリエーション療法に関する事業
- (5) ボディパーカッション教育を通じた海外教育支援、国際交流事業
- (6) ボディパーカッション教育に関する広報及びボランティア事業支援

代表理事 \*（カッコ）は在住地

・山田俊之 九州大谷短期大学教授、ボディパーカッション教育考案者（福岡）

## 特任理事（アイウエオ順）

- ・井上樹彦氏 B-SAT代表取締役社長、元NHK理事、久留米市参与（東京）
- ・岡田知之氏 洗足学園大学名誉教授、NHK交響楽団理事、日本吹奏楽指揮者連盟会長（東京）
- ・篠崎史徳氏 NHK交響楽団第一コンサートマスター（東京）
- ・八尾坂修氏 開智国際大学教授、九州大学名誉教授、前文部科学省中央教育審議会委員、元福岡市教育委員長（東京）

## 理事

- ・津田正之氏 国立音楽大学教授、前文部科学省教育課程調査官・音楽科（東京）
- ・山田淳司氏 神奈川県厚木市立北小学校校長、神奈川県小学校校長会副会長（神奈川県）
- ・丸尾直史氏 一般社団法人国際観音音楽交流協会代表、（株）エムセック勤務（東京）

## ボディパーカッションキッズOB会（役員）

- ・小田沙織 スポーツクラブ勤務、ボディパーカッションキッズ出身（福岡）
- ・音成志穂 市役所勤務、ボディパーカッションキッズ出身（福岡）
- ・山田奈実 会社勤務、ボディパーカッションキッズ出身（東京）
- ・井上彩香 元航空会社勤務、デフ・ボディパーカッションキッズ出身（埼玉）

## ボディパーカッション認定指導者団体「スクラムハート」

- ・代表：山田淳司、副代表：矢代貴司、他15名（教師、音楽教育関係者、他15名）
- 「デフ・ボディパーカッションキッズ」（聴覚特別支援学校・児童生徒のサークル指導者）
- ・中島裕子 福岡県立特別支援学校教諭、ボディパーカッション指導、手話通訳士（福岡）
- ・山田俊之 九州大谷短期大学教授、聴覚障害対応ボディパーカッション曲の作曲・指導（福岡）

## ボディパーカッション 商標登録の経緯と理由

### 「ボディパーカッション」という名称を使い始めたきっかけ

ボディパーカッションという名称を使い始めたのは、1986年12月からです。当時「山ちゃんのおもしろリズムスクール」で行っていた身体を叩くアンサンブルを、和太鼓に親しんでいた私は面白がって「人間太鼓」と呼んでいました（笑）。子どもたちがそんな名前ではカッコ悪いと言うので、カタカナ表記にするため「リズム、リズムック、アタック、パーカッション、ボディ」のような言葉を考えて、子どもたちにいくつか候補をあげて選んでもらうことになりました（他にもあったかもしれませんが忘れられました）。

- ・ボディーリズム
- ・ボディーリズムアンサンブル
- ・ボディパーカッション
- ・ボディーリズムックパーカッション
- ・ボディアタックリズム

結果は、子どもたちの多数決で、確か2票差でボディパーカッションに決まった記憶があります。当時は、クラスの子どもたちと楽しむだけの音楽活動でしたから、どのような名称でも気にしませんでした。実は、和太鼓が好きでしたので、「人間太鼓」（にんげんだいこ）の方が気に入っていました。笑

表記方法を「ボディパーカッション」ではなく「ボディパーカッション」にしたのは、ネイティブ発音だと「ボディ」の最初にアクセントつくので「ボディー」と伸ばさないほうがカッコいいのでは（笑）と考えてました。商標登録の時も、そのような考えです。



## 商標登録に至った経緯

ボディパーカッション活動は、授業参観でとても効力が大きく、前述のA君がみんなと一緒にボディパーカッション活動を楽しんでいる姿を保護者が見て、「あの教室を飛び出して暴れていた子が、みんなと一緒に楽しく頑張っているよ！」と評判になり、バツとしない私の授業が「山田先生のクラスは楽しそうでよかったね」に評価が変わり、私にとっても都合の良い便利な教材でした。（笑）

1988年以降も、学校が変わっても主に授業参観や校内音楽会で披露していました。しかし、高学年はすぐに飽きてしまうので、あの手この手で様々な曲を作っていました。このことが、のちに、様々な曲集を出版できることにつながったと思います。披露する機会は授業参観後の3分程度でしたが、子どもたちは大喜びでした。

ボディパーカッション活動大きく知られるようになったのは、1992年からです。当時、久留米市立篠山小学校に勤務して5、6年生を担当しており、6年生になったら様々な曲を演奏できるようになっていました。そのような時、保護者の方が日本テレビの方にお話をしたら、「愛は地球を救う24時間テレビ」で「小学生300人のボディパーカッション」の依頼がありそれが全国放送されました。

その後、朝の情報番組「おはよう日本」「おはようクジラ」「ズームイン朝」「めざましテレビ」などで、ボディパーカッション活動が取り上げられ地元で話題になり、そこで今までの演奏曲を披露するためにコンサートを行うことになったのです。それが1993年11月に開催した「日本初 ボディパーカッションコンサート」です。（地元の小学生約250人が参加。福岡県久留米市石橋文化ホール）

1994年以降は、ボディパーカッションクラブを結成して、土曜日に子どもたちのサークル

を結成しました。その後は、様々な教育・福祉・障害者施設の関係者からボランティアの依頼を頂き、とても良い経験しました。また、現場の先生方に、手作りの楽譜教材を送るなど、映像があるともっとわかりやすいということで、自費で教則ビデオを作って教育福祉施設に無料配布し、教育関係者には実費を頂いていました。

### “パチパチパンチ” 故島木譲二さんとの出会いがきっかけで商標登録へ

1995年、毎日放送のディレクターの方から連絡があり「島木譲二さんと一緒にボディパーカッションの授業をして頂けませんか？」という依頼がありました。

当時は、教育、福祉関係者の連絡がほとんどでしたのでつきり教育関係の方だと勘違いして、校長先生にご相談の上受諾しました。その時点では、すっかり勘違いしており、放送局は地元福岡のRKB毎日放送だと思い、大阪毎日放送とは思わなかったのです。内容もつきり大学関係の先生と授業研究をと思っていました。(笑)

しかし、1週間前に、ファックスで台本が学校に送ってくると、タイトルは「日本一のパチパチ対決!」と書いてあり、番組名は、「ダウトをさがせ」で司会を和田アキ子さんと島田紳助さんがされていました。とてもびっくりして、すぐに連絡したら、「学校現場ですので、教育的配慮は守ります。」と約束して頂きました。実際の授業では、子どもたちも大喜びで、島木さんもとても紳士的な方でしたので無事撮影は終わりました。それからは、地元ではボディパーカッション活動がとても評判になっていました。

### 商標登録申請へ

1996年、ボランティア活動を行っていた障害者福祉施設等の経験から、地元の久留米市立久留米養護学校(現:久留米市立久留米特別支援学校)へ転任する。早速、受け持った高等部の生徒たちとボディパーカッション曲「花火」を教材として指導を行いました。(のちにNHKニュースで放送されます)

1997年、「耳から音が聞こえない生徒は音楽を楽しめないのか?」という疑問から、福岡県立久留米壘学校(現:久留米聴覚特別支援学校)へ訪問し、校長先生にお願いして出張授業を始める。この時、来年度(1998年)に福岡で行われる「全日本壘教育研究大会全国大会」での、研究演奏指導を依頼されました。

このような経緯の中で、1997年5月、大阪のイベント関係の方から、「ボディパーカッションのレポートがたくさんあるそうなので是非教えてほしい」という連絡がありました。お会いして詳しくお聞きすると「体を鍛えた男性グループが、島木譲二さんのように上半身裸になってボディパーカッションを演奏する」というものでした。「島木譲二さんのテレビ放送を見て、子どもたちが大喜びしていたので記憶に残っていた」と言われていました。

この時、ボディパーカッション活動は学校教育や特別支援教育(知的障害、聴覚障害)分野で取り入れて大きな成果が得られると確信できていたところでした。特に、壘学校の聴覚障害の子どもたちは本当に喜んでくれており、とても充実した日々でした。

その時考えたのは、大阪のイベント会社が全国的なコンサートやイベントを行い、マスコミで報じられたら、今までのボディパーカッション教育活動は誤解を受けてしまうと思いました。「体を鍛えた男性グループが、島木譲二さんのように上半身裸になって面白おかしくボディパーカッションを演奏」すれば、「上半身裸の男性が身体を叩く面白だけのアトラクション」になってしまう!と思ったのです。それで、そのことを大阪のイベント関係の人に伝えお断りしました。

イベント会社の方は、養護学校、壘学校のことも理解して頂き、さらには自分の親戚に障害者がいて大変苦労されていることも話されました。更には、「そんなにボディパーカッションと言う言葉を守りたいのであれば、商標登録という方法があるので、費用はかかりますが申請されたらいかがですか?」と教えてくれました。

それまで全く登録商標のことを知らなかったのが、びっくりしました。さらにそのイベント関係の方は「今後、このような活動が商売になるとしたらボディパーカッションという言葉は別の人が商標登録すると思います。その時は、山田先生はボディパーカッションという言葉を使えなくなりますよ」と教えて頂きました。

そこで、1997年6月に地元の弁理士さんに相談して商標登録申請することになりました。

しかし、そう話はうまくいきませんでした。「ボディパーカッション」は一般名称ではないかということで審査が長引き、一度却下されました。様々な追加書類(当時の演奏会パンフ、写真、新聞記事、テレビ出演歴などの客観的資料等)を提出した後に、本当に今まで誰も使用していなかったことを証明できました。そして、1999年6月に商標登録が認められました。

しかしこの時点では、「ボディパーカッション入門」(2001年出版)、「NHK交響楽団との共演」(2001、4、6年)、「花火」音楽科教科書掲載(2005年)、「手拍子の花束」特別支援教育教科書掲載(2012年)などは予想もつかないことでした。

登録認可がされるまでに2年近くかかったのですが、ポイントは様々な新聞紹介記事でした。中でも1995年12月に、朝日新聞の記者の方が「新聞社の世界言語データ検索でボディパーカッション(bodpercussion)を調べても、山田先生の新聞記事しか出てこなくて、一体どんな活動ですか?」と聞かれ取材を受けて、子どもの教育活動として大きく新聞で紹介されたのが決め手になったようです。

さらには、追加資料として1998年2月3日付け日本経済新聞の裏一面の「文化」欄に掲載されたものを提出したのも大きかったと思います。

ボディパーカッション教育活動は、1986年の当時の子どもたちが名付けてくれた言葉に対する思いと、1996年以降に特別支援学校(養護学校、壘学校)の子どもたちも楽しんでくれたことが大きな誇りになっています。そのためにも、今後もハンディキャップを持った子どもたちが楽しめる教育教材として発展させられたらと願っています。

ボディパーカッション教育教材は、あくまでも音楽教育、特別支援教育、音楽療法、福祉分野で活用して頂きたいという思いで商標登録申請をしています。

別のジャンルのパフォーマンス(例えば、ストンプ…ニューヨークブロードウェイで行われている、プロの打楽器奏者がおこなう身体を叩くアンサンブル)等をされる場合は、過去に私が子ども達とアンケートを取ったような名称「ボディーリズム」「ボディーアタックリズム」などの別の名称で活動して頂けたらと思います。

### コロナ禍の中。現場での思いや現状

先日、中国上海の中学校で、授業が再開したニュースが流れていました。その時、音楽に合わせて身体を叩いてソーシャルディスタンスを保ち授業をされていました。まさしく、私がおこなってきたことだったのでとても嬉しく思いました。

現在、私が「山ちゃんの楽しいリズムスクール」というタイトルで連載している「月刊 教育音楽小学校・中学校版」(音楽之友社)で特集を冊かせていただきました。名付けて「ソーシャルディスタンス・ボディパ」です。よかったらご覧ください。目的は以下のような内容です。

- ・「どんな状況でも誰もが楽しめる! ボディパーカッション」ソーシャル・ディスタンス(社会的距離の保持)で音楽活動を楽しもう。
- ・飛沫感染防止のため歌唱指導や管楽器を使った活動の制限、さらにはコミュニケーションの制限……。こんな中でもボディパーカッションは、ノンバーバルで楽しめる。
- ・どこクラスの雰囲気や違ったり、落ち着きのない子や不安げな子、イライラしている子が多くなったりとい つもとは違う子どもたちへのリフレッシュ活動。

### 今後の展望について

カンボジア教育支援で行ったような、「楽譜が読めない、楽器がない、音楽に親しみがない」地域(アジア、アフリカ、他)の子ども達へ身体を使ったリズム活動を通して、音楽教育・特別支援教育、福祉教育の教材として発信したいと思っています。その為に、方法として、海外青年協力隊へ教材の無償提供などでタイアップしてボディパーカッション教育の楽しさを伝えることを考えています。

ウィーン国立歌劇場やニューヨークカーネギーホールなどの世界的なホールで作品発表し、観客の方々には教材の主旨を理解して頂き大好評を得ることができました。今後は、「5年後50ヶ国、10年後100ヶ国の子ども達へ、ボディパーカッション教育の楽しさを伝える」目標のために、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーンの国連エントランスホール、パチカン宮殿など世界中の国々の教育福祉分野で社会貢献を担っている所での作品発表を考えています。

指導者養成や指導方法を国内外に広めるため、ZOOM等のWEB講座を行い、国内はもとより、世界中の教育福祉関係者や関心がある学生にインクルーシブ教育教材として発信していく予定です。特に、講座を直接受けられない方々や、海外の興味ある方々にも発信できたらと思います。

今年の9月には、ロシアの芸術系大学との交流や、現地の聴覚障害の生徒と学校での指導や交流を計画していましたが、コロナの影響で延期になりました。是非、今後実現したいと考えています。

今回このようなきっかけを作っていただいた西日本打楽器協会関先生と、ボディパーカッション演奏し協力して頂いた平成音楽大学パーカッションチームの方々にお礼を申し上げます。

Youtubeチャンネル  
ボディパーカッション教育動画サイト  
Educational Body Percussion





# 各協会のお知らせ

## 《日本打楽器協会》

- 打楽器にもさまざまな分野がありますが、それぞれに興味をお持ちの方などなたでも入会できます。
- 年会費=A会員(演奏・教育指導に携わる方)  
6,000円+入会金1,000円=7,000円  
B会員(一般・学生)  
3,600円+入会金1,000円=4,600円
- 会長=岡田知之
- 理事長=百瀬和紀
- お問合せ=momoseitaiko@gmail.com

## 《全日本打楽器連盟》

- 会長:塚田靖
- 副会長:坂上弘志 定成庸司
- 事務局:黒一則
- お問合せ=各打楽器協会ウェブサイトからお願い致します。
- ・北海道打楽器協会 理事長:真貝裕司 <http://dagakki-h.pupu.jp/>
- ・関東打楽器協会 理事長:定成庸司
- ・中部打楽器協会 理事長:和泉正憲 <https://chuubudagaxtuki.jimdo.com/>
- ・関西打楽器協会 理事長:坂上弘志 <http://bcaweb.bai.ne.jp/percussion/>
- ・西日本打楽器協会 理事長:関修一郎 <http://blog.livedoor.jp/dkwest/>

## 《PAS ( Percussive Arts Society )》

- PASとは米国を中心に全世界に30,000人の会員を擁する世界最大のパーカッション・ドラム会員組織です。貴方もPASのメンバーになって世界の打楽器に飛躍しませんか。
- お問い合わせ入会等は下記ウェブサイトからお願いいたします。  
PAS:<https://www.pas.org>  
※リンク先は英語表記です。

## 《日本マリンバ協会》 ~2020年から日本木琴協会から改称しました~

- 本会は1950年に設立され、全国の木琴奏者、指導者、愛好家の集まりです。全国各地に支部を有し、各地域毎、コンサートを開催するなど木琴(マリンバ)音楽の普及活動を展開しております。
- 入会方法=年会費2,600円を添え、郵便振替にて下記口座宛にお申し込み下さい。  
口座番号:「00850-7-137881番」加入者名義:「日本マリンバ協会」
- 本部=〒105-0023 東京都港区芝浦1-6-41-1923 朝吹英太方  
日本マリンバ協会 会長 朝吹英太
- 協会についてのお問い合わせは、下記にお願いします。  
広沢会長代行 TEL 0263-73-0753  
森山 副会長 TEL 04-2934-4759  
森 専務理事 TEL 0561-54-7133

## 《JPC メンバーズシステム》

- JPCは、ジャンルを問わず、プレイヤーをハード、ソフト両面からサポートする頼もしい組織です。
- 主な活動内容  
年4回会報発行・各種クリニック・ショッピング割引有り
  - 入会方法=各シティの店頭にて入会申込書を記入の上、入会金2,200円+年会費1,650円=3,850円を添えてお申込み下さい。ご来店できない方は各シティへ電話でお申込み後(申込書はスタッフが代わります)、現金書留または振替口座(下記)でご送金下さい。ご入金確認後、JPC会員カードを郵送します。  
【JPC事務局】〒111-8567 東京都台東区西浅草1-7-1 コマキビル6F  
電話03-3845-3041
  - 振替口座  
口座番号:00190-7-0153115  
加入者名:株式会社コマキ楽器

## 編集後記

さあ、鬱々としているばかりではいけません！  
こんな状況だからこそ、何をすべきか、何ができるのかをじっくり見直し、考え、これまでは違った行動を起して行くチャンスではないでしょうか。  
「行動」にならなくて、「考動」と言った著名人もいらっしゃいます。  
皆で前を向いて進んでいきましょう。JPCは、そんな皆様を全力でサポートさせていただきます！

本誌では、家で、学校でと、様々な角度から現在の状況における打楽器との付き合い方を提案させていただきました。そこで思うことは、打楽器にはいろいろな音や表情があるということ。「面白い立たせてくれる音」「フクフクさせてくれる音」そして「癒やし効果がある音」など、使い手の心持ち次第で様々な音色を奏できます。打楽器の特性上、自由に音を出せないケースも多々あることと思いますが、数ある打楽器の中には、必ず今の我々にマッチする音が存在するはずですよ。

新しい「音」との出会いがきっかけで、新しい何かが始まるかもしれません。新しい取り組みが、新しいものを生み出すかもしれません。でも、実際に行動に移そうと思った時、うまく行かないことがあるかもしれません。そんな時はぜひ私たちに「相談ください。小さな事しかできないかもしれませんが、皆様のお力になれるよう全力で対応させていただきます。

楽器との関わり方も気になりますが、自由に外に出て思い切り体を動かすことがままならない今、心と体のバランスを保ち、積極的かつ静かに身体を動かすことがとても大事なことにように思います。山北健一さんに簡単に実践できる「氣功」をご紹介していただきましたが、氣功以外にもストレッチや筋トレなどを実践し、健康はもちろんのこと、今後の演奏活動にも繋がる身体作りというものを考える絶好のタイミングかも知れません。さらには、全身に神経を配り意識しながら体を動かすことで、頭で思い浮かべたイメージを表現するためのスムーズな体の使い方も身につくものも身につくかもしれません。

自分のために、そして周りのために、今できる、今だからこその、そんな新しい日常が、そしてその先に続く明るい未来が開けたら良いですね。—GK—

### 次号の発行日 10月10日

JPCの投稿は8月31日までにお願いいたします。

※今号の刊行に遅れが生じた為、会員の皆様にはご心配をおかけしましたこと、心よりお詫び申し上げます。

## 《表紙》

山田俊之  
(ボディパーカッション教育振興会代表)  
(写真撮影:コマキ通商営業部・内山洋樹)



発行日:令和2年(2020年)7月10日  
発行人:株式会社コマキ楽器  
〒111-8567 東京都台東区西浅草1-7-1  
TEL: 03 (3845) 3041 FAX: 03 (3845) 3066

編集人: JPC事務局  
デザイン: 株式会社ColorsDesign  
定価: 315円(本体286円)